



© Yuki Nakase

セカンド・ステージ・シアター

ステージ・マネージャーのつとめ

昨年12月号のロンドンエッセイ60に、小野あずささんが執筆された『舞台監督と台本』は、こちらニューヨークの舞台制作現場に状況がとても似ていて、共感いたしました。アメリカの舞台制作においても、ステージ・マネージャーはリハーサル初日から千秋楽まで舞台上で起こりうるすべての動きを管轄しています。ステージ・マネージャーを日本語に訳すと舞台監督かと思いますが、両者の役割が多少異なるように見受けられます。ニューヨークでステージ・マネージャーとして働く日本人の友人は、日本では演出家補佐という役割で仕事をしています。彼女が言うには、アメリカのステージ・マネージャーの仕事は、日本の舞台監督とも演出家補佐とも異なりますが、スケジュールの管理やカンパニーを仕切る点で、どちらかという演出家補佐の仕事と重なるそうです。

舞台制作は真のコラボレーションなので、チームの中の1人だけが公演の良し悪しを左右するとは言い難いですが、ステージ・マネージャーの人徳、経験値とスキルは演出家のそれと並んで舞台成功の鍵を握っていると感じます。ステージ・マネージャーはスタジオ・リハーサル初日からカンパニーに参加します。カンパニーに関係するすべての人の連絡先を明確にし、スケジュールの管理はもちろん、演出家が役者と一緒に作品を作る過程で気がついた点を毎日リハーサル終了時にメールでレポートします。たとえば、照明に関わることといえば、小道具のランプの付け消しのタイミングや、役者が舞台から客席に降りるなど特別なステージングなどがリハーサル・レポートで知らされます。舞台稽古では、日ごとのスケジュールから各部署のキューの管理までステージ・マネージャーの一声に皆が賛同します。もちろんユニオンと各劇場によってさまざまですが、平均的には午前中にデザインの直し、午後から夜にかけて約10時間から12時間の舞台稽古が行われます。休憩をちゃんととれるのもステージ・マネージャーのおかげです。ものつくりの最中は演出家もデザイナーも休憩なしで働いてしまいがちですが、そうすると1日の終わりころに皆イライラして仕事が進まなくなります。舞台稽

古がよいよ佳境に入るという場面でも、ステージ・マネージャーが「はい、終わりー!」と言って皆を休憩させる冷静沉着さに感謝します。

私はステージ・マネージャーが舞台上すべての動きのキュー出しをすることこそが、舞台制作をより結束させる秘訣だと感じています。舞台機構や照明卓がどれだけコンピューターに頼っていても、その操作するのは人間で、公演のたびに微妙に違うタイミングで動く舞台上に立つ役者やダンサーに伝えつつも、光と音と映像と装置の動きを一致させるのはステージ・マネージャー唯一無二の仕事です。これまで、とてもバラエティに富んだステージ・マネージャーたちと仕事をさせていただきました。素晴らしいステージ・マネージャーと仕事するときは、まさに大船に乗った気持ちです。彼らは照明が何を求め何を追求しているのか無言のうち理解してくれます。演劇では、私が「うまくいかなかったなあ」と感じた照明転換を察しもう一度練習をやり直してくれたり、舞踊では、前もって打ち込んだ照明のきっかけを紙に書いて事前に渡しただけで、リハーサル初日に完璧にキュー出ししてくれたり、本当にステージ・マネージャーさまです。

最後に余談です。小野さんが書かれていたデジタル化した楽譜についてですが、これもまさに今私が直面している課題です。オペラや音楽劇でミュージシャンが楽譜をiPadで再生するようになりました。楽譜あての照明器材を用意しなくて済むので労力的には楽になった反面、光量の均一化と暗転に頭を抱えています。カンパニーに所属する歌手のiPadなら、カンパニー所有の統一したiPadを使用することで光量の均一化は可能となりますが、ツアーの現地で参加するオーケストラのメンバーが各自所有するiPadの光量はまちまちです。また、音楽が終わったと同時に完全に暗転することも不可能に近く、どうにかしてiPadの遠隔操作ができるといいのですが、まあ難しい。